

宮沢賢治作品における狐

—昔話や民話、伝承との関係—

A Study about Foxes which are characters of Kenji Miyazawa

—Relationship with folk tale—

高橋直美

TAKAHASHI Naomi

要旨

宮沢賢治の「とっこべとらこ」「雪渡り」「茨海小学校」に焦点を当て、賢治童話に登場する狐と昔話や民話、伝承に登場する狐とを比較検討し、賢治童話に登場する狐の親しみやすさの根源とその特徴を考察する。

上記の賢治童話に登場する狐は、他の作品で単に狐という一括りの名称で描かれているものとは事情を異にしている。なぜなら昔話の内容を踏まえながらも、賢治独特の異類間における信頼や平等、因果応報等が描かれているからである。

そして、賢治ワールドに登場する独特な存在である狐の話の違和感なく読める理由は、話の構成の根本に日本人が慣れ親しんだ昔話や民話、伝承にみられる狐の要素を多分に含みながらも身近で新しい話になっているからであるといえる。

キーワード：宮沢賢治、「とっこべとらこ」、「雪渡り」、「茨海小学校」、昔話、民話、伝承、狐

1. 狐について

『新宮澤賢治語彙辞典』（原子朗著 東京書籍1997年7月）の「狐」の項をみると、

肉食目イヌ科の哺乳動物。ノウサギやノネズミを食うので古くは農村にとって有益獣であり、農耕神としての稲荷神の化身、使者とされ、霊獣でもあったが、民話等では一般に人間をだます怪獣とされてきた。

とある。

同書では、宮沢賢治作品に登場する狐について「とっこべとら子」のような民話に基づく人をだます狐の話、「貝の火」「黒ぶだう」のようにずるがしこい狐の話、「茨海小学校」「雪わたり」のように善い狐の話に区別している。

そして、狐の種類に関しても、日本で一番多い「赤狐」、赤狐の変種で全身黒毛（ただし、尾先は白）の「黒狐」、ベーリング海沿岸に生息する「白狐」、北極圏に棲み冬期白毛になる「北極狐」、その呼び替えと思われる「雪狐」、賢治の想像上の種類かと思われる「モロッコ狐」背中に黒い十字の出る赤狐の変種「十字狐」等、多種多様な狐が作品中に291回も登場すると記されている。

一方、『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（天沢退二郎他 弘文堂 平成22年12月）には、河合雅雄『森に還ろう』（小学館 2003年）に掲載されている表が使用され、童話（劇）127篇のうち、主人公になった動物とその登場頻度としては、狐が5回でトップ、次に3回のねずみ・蛙、2回の猫・雁・梟・山猫、1回の狸・兎・猿・馬・牛・鹿・象・熊・豚・氷河鼠・よだか・まなづる・毒蛾・蜘蛛・蟹・なめくじ・竜の順となっている（同書447頁表2「童話（劇）127篇のうち主人公になった動物と、その登場頻度」）。

また、童話（劇）127篇に登場する主な動物の出現頻度（主人公として登場する作品中の主人公の頻度を除く）は馬が文出51回、単出30回でトップであり、2位が狐の文出16回、単出4回、3位が猫の文出12回、単出5回、5位が獅子で文出12回、単出0回、6位が牛の文出10回、単出8回と続いており（同、表3「童話（劇）127篇に登場する主な動物出現頻度」）、賢治作品において狐は非常にポピュラーな存在であることが理解できる。

古来日本では狐は特殊な霊力を持つ動物とみなされており、『日本書紀』の「斉明3年は歳条」に「石見国言、白狐見」とあり、白狐の出現は瑞兆とされていた。『日本霊異記』「第二縁」「狐を妻として子を生ましめし縁」では人間との異類婚姻譚が記されており、平安時代半ばになると妖狐譚も登場する。

中村禎里『日本人の動物観—変身譚の歴史』（株ビイングネットプレス 2006年5月）「第二章 仏教思想の浸透のなかで」の表2-1「『今昔物語』における動物から人への変身」（91頁）を見ると、狐は『今昔物語』に登場する話で合計9回も人へ変身しており、2位の蛇が合計7回、3位の馬の3回以下とあり、その差が大きいことがわかる。

では、一般的に狐とはどのような動物であろうか。

『日本大百科全書23』（小学館1988年9月）には、「雑食性で、昆虫、魚、カエル、鳥とその卵、小型の哺乳類、果実、ブドウそのほかの液果などを食べるが、ノネズミとウサギを食べることが多く」、「また、死んだふりや病気で苦しむふりをしてウサギやカラスをおびき寄せ、あるいは頭に水草をの

せて静かに泳ぎ、水に浮かぶカモに近づいてとらえるともいわれる」とある。

このような狐が得意とする独特な猟法である〈化かし〉、つまり狐が獲物を捕らえるのに用いる〈チャーミング〉と呼ばれる特異な策略はいろいろな例で報告されている。このような〈チャーミング〉が天性のものか学習によるものかはいまだに判明できていないが、狐のいたずら好きな性格と知能の高さをもってすれば、簡単にだまされる人が出る可能性もある（今泉忠明『狐狸学入門—キツネとタヌキはなぜ人を化かす？—』講談社 1994年7月）という。狐は動物の中でも頭脳明晰で特殊な存在であるといえる。

2. 狐の名前—おとら狐—

最初に宮沢賢治作品の「とっこべとらこ」について考察する。

これは大正10年から11年頃に執筆されたと考えられている生前未発表の作品であり、強欲な金貸しの六平が千両箱に目がくらんで騙されたという昔の話と、平右衛門が村会議員になった祝賀会で待遇に不満を抱いた正吉が行ったいたずらを狐にだまされたと思込む最近の話を地元で伝わるおとら狐（とらこ）伝承に絡めて、本当に狐は人を化かすのか否かについて提議するという物語であり、「とっこべとらこ」は全国に分布する「おとら狐」の話と盛岡地方の「斗米とら子」の伝承を結び付けたものである。

この作品は、有名な狐の昔話といかにも人が人を騙したとわかる最近の事件とを結びつけることで、狐が人をだますという話は偽物であることを示そうとしていると天沢退二郎は述べている（『民話と創造—宮沢賢治と柳田国男』『ユリイカ』青土社 昭和61年7月）。

ちなみに、この作品に登場するだまされる側の人間は「欲ふかのじいさん」（金貸し）と「今春村会議員になった平右衛門とその親類」（宴会で酒に酔っている）である。

金貸しの慾ふかじいさんも平右衛門と親類同様「ひどく酔っぱらった」状態でだまされたと述べており、そこには狐の姿どころか影も形も見えず、だまされた証拠はない。

要するにその場所がとっこべとらこの伝承地であるため、自分の失敗をその伝承と結び付けて「とっこべとら子」にだまされたと本人が主張しているだけであり、本当に騙されたかどうかは全くわからないのである。

一方の平右衛門とその親類の話では逃げた人たちが家の中から土産の藁包を引く音を聞いただけである。

反対に、「源の大將」の仕掛けを施したのが「小吉という青い小さな意地悪の百姓」であることが文中にほのめかされており、実際に狐が人々を化かした場面は昔の話同様、誰も見てはいない。

日野巖は『趣味研究 動物妖怪譚』（養賢堂 大正15年）に、

狐にばかされるといふのも、人によるので、心猛くまっすぐな人は決して欺かない。聖人君主も亦欺かない。（中略）

この狐にばかされるといふのに二種ある。一つは自らは知らないが、人が狐の仕業にしてしまふので、之は知らぬ山道を迷つたり、或は精神朦朧として附近の山野を彷徨し、家に帰つてからも自分は何處を歩いたのか少しも知らない。それで人は狐か狸の仕業だらうといふ。その人もわ

からないから多分さうだらうといふことになる。すると狐談が一つ出来るわけである。山道でころんだ時口についた馬糞を見て狐の御馳走は馬糞だといふことになる。

も一つは、狐談について多少の智識のある人が、夕暮方野道をたゞ一人歩むと化かされはしまいかと心は恐怖にみちていつも慄いてゐる。そこで狐がみなくても、錯覚や妄覚で狐を見、自らが自らを化かすことになる。この時若しも狐の実物でもみるならば、必ずすぐ化かされたと思つて、自らそんな状態に陥ってしまう。(中略) 即ち、多くは自ら作つた精神状態である。之は気の強きものにはたゞ、事なしと書いてあるのでも察せされる。(P.359~360)

と記しているが、狐が人を化かすことについて、賢治も「とっこべとらこ」に、

みなさん。こんな話は一体ほんとうでしょうか。どうせ昔のことですから誰もよくわかりませんが多分偽ではないでしょうか。

どうしてって、私はその偽の方の話をも一つちゃんと知ってるんです。それはあんまりちかごろ起つたことでもうそれがうそなことは疑いもなにもありません。実はゆうべ起つたことなのです。

と記している。

日野は人が狐に化かされるのではなく何かあると狐の仕業にする、恐怖心から錯覚をみると述べており、賢治も「とっこべとらこ」で狐に騙された話と同様の疑問を投げかけている。狐が人を化かすのではなく、人が自分で化かされると勝手に解釈することに関しては、賢治と日野は一致しているのである。

ところで、賢治作品に登場する「とっこべとらこ」の舞台は盛岡市であり、盛岡市のHPに、

茸手町と紺屋町との間に斗米山(とっこべやま)という大石があり、古くはこの辺りを斗米と書いた。紺屋町から当町へ出る横町を愛染(あいぜん)横町と称した。町人や牛馬曳きは現岩手銀行中ノ橋支店前にあった高札場「札(ふだ)の辻(つじ)」を敬遠してここを通つたという。

愛染横町は、地内に愛染明王像を有する宝林山愛染院に由来する名前で、明王像は後に愛染院が廃寺となつてから斗米山(とまいさん)長福院に移された。古謡に「斗米寅子(とっこべとらこ)に、馬場松子(ばばまつこ)、石間亀子(いしあいかめこ)に騙されな」と詠われ、宮沢賢治作品『とっこべとら子』の舞台になっている。

(<http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009408/1009434.html>)

とある。盛岡市茸手町も紺屋町も賢治の通つた旧制盛岡中学校の近所であり、賢治にはなじみの深い場所であつたと思われる。

賢治は作中で

「とっこべ」というのは名字でしょうか。「とら」というのは名前ですかね。そうすると、名字がさまざまで、名前がみんな「とら」という狐が、あちこちに住んでいたのでしょうか。

と記しているが、この場合の「とっこべ」は地名であり、地名が苗字になっている。これは国定忠治が〈国定村の忠治〉であるように、昔の苗字のない階級における人の呼び名と同じである。

柳田国男は「おとら狐の話」(玄文社 大正9年2月)^{注1)}で、「狐で人を騙す程の者には、名前があるのが殆ど普通である」と述べ、それは男女を区別したものが多いという。青森県外南部の銅金という山路には「銅金のチャガラ子」、新山には「ハヂキリ」という毛の色や尾の形に由来した名前の老

狐がいたが、このような名前はもちろん人間にはつけない。

しかしながら、豊澤のトガリ子、小澤のオマツ子、鳥屋森のオナツ子、杉長根のサン子、土手杜のアグリ子のように、「子」のつく名前は人間の女性の名前にも使用されており、狐の中では特にサン子という名前が多かったと記されている。これらを見ると苗字にあたる部分には地名が来ており、名前には意味がある。牝狐が多いためか、女子につける「こ」がつく名前が多いようである。

また、秋田県雄勝郡羽後町杉宮の元稲田神社（通称：あぐりこさん・あぐりこ稲荷神社）の伝承には、「雪の出羽路」に『元稲田稲荷ノ社、本殿（註三輪神社）の西二丁斗に稲荷ノ社あり、昔は野ノ宮といひし、近き世元稲田小河寺ともはらここをいへり、正徳五年七月二十二日授正一位たまふ御ン神也。つかはしめの神狐（とうめ）をあぐりといふ女狐也、そは女子のみあまた生て女子に飽といふ詞せ…』…と記されている。（「秋田県神社庁HP」）

（http://akita-jinjacho.sakura.ne.jp/tatsujin_etc/kennsaku/ugo/05_gendouda.html）

とあり、神の使いになった狐の伝承や新潟県古志郡に石動のオサン、同下條村にとろろんじのオコン、定明寺村に橋場のオカンなどという牝の霊狐が勧善懲悪を助けたという物語も伝わっている（柳田 前掲書）。このような昔話に加えて信太森葛葉稲荷神社の縁起にある葛葉狐等を考えると、狐は単に人を化かす悪者であると言い切ることはできないだろう。

柳田国男はまた前掲書で、大磯の虎女や登宇呂の姥・若狭の八百比丘尼の話、都藍尼などの話と考えあわせ、「此等の信仰生活に携はる婦人の名に、おとらは何か深い由緒のあつたものと考えてよろしいやうに」思え、

狐のおとらの起源が、之を使つて居た姥の名のトラに存し、此種の老女のおとらの名を好んだのは、トラ又はトウロと謂えば尊い巫女に似つかはしかつたためで巫女のトラは人の願を足はしめ、世の幸ひを垂れるを理想としたからであつても、要するにこれ甚だしき退歩である。狐の側から申すならば、誠に圖らざる名誉である。もうおとら狐も此位で引込んでよからうと思ふ。^{注2)}として、人間の勝手な都合で狐の代表的な名前を〈おとら〉としたと述べており、〈おとら〉という名前が全国的に使われていることがわかる。

一方「とっこべ」については、葺手町商店街のHPに、

葺手町と紺屋町の間には「斗米山」があり、大きな石が露出した花崗岩地帯であった。記録では「とっこべ石」「とっこべ森」という記録もある。ここから盛岡八幡宮一の鳥居の石材を掘り出したことが「盛岡砂子」に記載されている。この地の地鎮として斗米稲荷社（現お不動さん境内）も祀られている。（<http://www.fukidecho.com/index.php>）

とある。その地には稲荷神社が存在していること、盛岡市高松公園付近には狐森、狐崎神社、稲荷窪という地名が今日でも残っていること、狐崎稲荷神社や榊山稲荷神社などもあることから、おとら狐ゆかりの地は、歴史的にも狐にゆかりの深い地域であることがわかる。これは前掲「おとら狐の話」にも登場する長篠城址のおとら狐が城藪稲荷としてまつられているのと同じである。長篠のおとら狐は長篠城鎮守の稲荷のお使いであったが、長篠の戦い後、末社として取り残され、誰も祀らなくなったため恨みに思い、周囲を荒らしまわり、人に取り付いて重い病としたが、稲荷として祀られて以降は様々な願い事をかなえてくれるとされている。

「とっこべとらこ」もまた斗米稲荷社に祀られており、祭祀される前は周囲に迷惑をかけていたと

いう点で共通している。

前掲の盛岡市HPをみると、古謡に「^{とっこべとらこ}斗米寅子に、^{ばばまつこ}馬場松子、^{いしあいかめこ}石間亀子に騙されな」と詠われているとあるが、その中でも賢治が「とっこべとらこ」を選んだのは地域に深く根付き、歴史があり、全国的に有名な名前のついた狐だからであろう。

ところで、柳田国男は「松島の狐」(『東京朝日新聞』「狐猿随筆」大正15年8月)で東北の狐の話として、

例へば上谷澤の村に居た狐などは、溝に降りて雑魚小海老をあさるのに夢中になつて、平田五郎にあべこべに脅かされ、大事の玉を取落して逃げ散つた。後に婦人に化けて来て哀訴嘆願して返してもらひ、その御禮に百人力を授けて行つたなど、傳へられる。中部以西の狐ならば、斯ういふ場合には必ず仇を復し、また玉を忘れるやうなぶまぶまなこともしない。人と狐との間柄も、東北などでは必ずしも敵對をもつて終始しなかつた。^{注3)}

と述べ、同じ狐の話でも東西では全く違うことを指摘している。

このように考えると、長篠のおとら狐は西の狐であるから人に憑いて悪さをするが、盛岡のおとら狐は東北の狐だから実際には人を騙さないともいえるだろう。

賢治が作品中で「みなさん。こんな話は一体ほんとうでしょうか。どうせ昔のことですから誰もよくわかりませんが多分偽ではないでしょうか。」と記し、〈おとら〉という狐の物語を人間の都合で創作したようなニュアンスを示しているのも、東北の狐の特徴を理解していたからかもしれない。

また、賢治が狐は人を騙さないと述べているのは、狐にも善狐と悪狐がおり、人々がその違いを確認せずに狐は騙すという偏見を持っていることに対する批判、ひいては慾ふかじいさんや平右衛門など、慾やうぬぼれが強い傲慢な人間の持つ思い込みや偏見による差別や人間至上主義に対する批判であるとも考えられる。

人間と狐を含む妖怪との関係について、宮田登は『宮田登 日本を語る 妖怪と伝説』(吉川弘文館 2007年2月)に、

近代化が進む以前の日本では山と里の関係で、里の人間が山中の怪異というものを強く意識して、それを妖怪現象として受け止めて、それを尊重していた時期があった。妖怪の方も人間に対し警告は発するけれども、とりたてて害を与えないという原則があったのである。

それが江戸時代になると、妖怪が逆に人間にたぶらかされたりするようになる。つまり、その頃になると人間の方が優位になり、妖怪が下位になる。力関係が逆転してしまい、たとえば落語の「王子の狐」のようにキツネが人間に化かされてしまう。近世になると、そういう逆転した認識の仕方を持つようになる。(3~4頁)

と記している。

天沢(昭和61年)は「とっこべとらこ」は古い伝承を利用した慾ふかじいさんの話を最近の話を導入することで昔の話を偽物と説明し、民話の構造を自在に操ろうとする賢治の創作姿勢がみられるとしたが、一方では「王子の狐」同様、人間の失敗をおとら狐の責任にするという点で、狐が人間の被害者であるともいえるだろう。

逆に考えれば、賢治はこの話を創作する際に稲荷に祀られるような盛岡のおとら狐をよく理解しているからこそ、近代以降の人間と妖怪の立ち位置を確認し、人の責任を狐に転嫁することの非を述べ

たとも考えられる。

3. 「雪渡り」に登場する狐の名前—

童話「雪渡り」も狐が重要な位置を占める話である。

「雪渡り」は雑誌『愛国婦人』大正10年12月号と大正11年1月号に分載された作品で、登場する人物や狐の名前は作中で歌われるわらべ歌に由来したものとなっている。

しかも、「堅雪かんこ、凍み雪しんこ。」「凍み雪しんしん、堅雪かんかん。」「四郎はしんこ、かん子はかんこ、おらはお嫁はいらないよ。」の歌に揃えられたように、

「堅雪かんこ」「堅雪かんかん」「かん子はかんこ」

⇒かたゆき⇒かんかん⇒かんこ⇒かん子

「凍み雪しんこ」「凍み雪しんしん」「四郎はしんこ」

⇒しみゆき⇒しんしん⇒しんこ⇒しろう（四郎）

という命名方式がとられている。

また、子狐紺三郎は四郎の「狐こんこん白狐、お嫁ほしけりゃ、とってやろよ。」との呼びかけにあるように白狐であり、この「狐こんこん白狐」という呼びかけが「狐こんこん、狐の子」に変化することで、紺三郎が白狐でありかつ子狐であることが判明する。

この子狐の名前である紺三郎は狐の形態（年齢）により苗字が「子狐」であり、「狐こんこん」の「こん」+三郎でこん三郎（紺三郎）が名前になっている。この命名法は前述の柳田の「おとら狐の話」にあるものと似た方式である。

ところで、三郎という名をもつ狐に飯綱大権現の化身である飯綱三郎がいる。

『天狗の総合研究サイト、天狗参上』によると、

長野県飯綱山に住む天狗。東日本の代表的な天狗で、知名度や眷属の数は富士山の「富士太郎」を凌ぐとされています。一説には長野県の飯綱山の天狗を「飯綱太郎」、戸隠山のを「飯綱次郎」、宮城県仙台市の飯綱山のを「飯綱三郎」と呼ぶともいわれています。信者には数多くの霊験を施したといわれ、日本全土を襲った凶作の時に「天狗の麦飯」と呼ばれる飯綱山頂の砂——飯砂（いずな）を日本全土に配り、多くの命を救ったといわれています。

飯綱山の修験者は飯繩の法と呼ばれる方術を駆使する事で知られていますが、この飯繩の法とは茶吉尼天法とも称される外法です。これは茶吉尼天の眷属たる管狐その他の霊獣を使役するとされる邪法です。この茶吉尼天と同体とされるのが飯繩権現なのですが、飯繩三郎はこの飯繩権現そのものであると考えられています。飯繩権現は茶吉尼天・不動明王・天狗が習合したものと考えられますが、天狗への信仰は、狐や稲荷信仰に極めて近いものでもある事をうかがうことができるのです。

(<http://www.takaosan.info/tengu/index.html>、高尾山総合情報サイト『高尾通信』)

とあり、東北の狐、管狐、人間に食糧（麦飯）を与える等の要素が、キビ団子を人間の子どもたちにごちそうする紺三郎とよく似ている。

しかも、飯綱三郎は「天狗の麦飯」と呼ばれる山の砂を全国に配布するが、砂を麦に変える〈化か

し)は行っておらず、紺三郎の黍団子もまた本物である。

また双方とも〈化かす狐〉ではなく、善狐であることがわかる。『日本民俗宗教辞典』(佐々木宏幹他 東京堂出版 2005年7月)に、

稲荷と狐とが密接に結びつき、しばし同一のものとみられるのは、狐塚などの伝承にあらわれるように、狐という獣が山の神ないし田の神の使い、またはそれらの神そのものと信ぜられたためであろう。(563頁)

とある。狐塚は狐の穴と深い関係があり、狐の穴については後述する栗原の論文や柳田の論文に詳細が記されている。善狐である白狐の紺三郎は山の神の神使とも考えられる。

また紺三郎は岩手山麓に住み、農作物を自家栽培するという設定から、黍団子はごく自然なものとして登場する。黍は酸性土壌や干ばつにも強く、稗に比較して生育期間が短いので寒冷地にも適応し、収穫も手間がかからないため岩手山麓で子狐が栽培するのに適した作物であり、いかにも賢治らしい現実的な選択であるといえよう。

三郎の名に関しては、「風の又三郎」の主人公の本名が高田三郎であり、ほかにも主な登場人物として一郎や五郎が登場する。また「どんぐりと山猫」の主人公も一郎であり、賢治作品には「朗」のつく名前が多い。「雪渡り」の主要人物である四朗、その兄が一郎・二郎・三郎となっているのも同様であろう。

その一方で、四朗よりも大人らしい態度をとる白狐は〈四〉郎よりも目上の存在として〈三〉郎、すなわち狐(コン=紺)三郎と付けたと考えれば、人間と狐という異類を差別しない、仏性の平等ということを常に考えた賢治らしい命名法といえる。

紺三郎の幻燈に登場する、左足を人間の毘に入れてしまった狐のこん兵衛は、狐に騙されたとされる甚兵衛(じんべえ→人はジンと読むので人兵衛)と呼応して、狐の鳴き声である〈コン=こん〉兵衛になったと考えられる。

また、「狐こんこん狐の子、去年狐のこん助が、焼いた魚を取ろとしておしりに火がつききゃんきゃんきゃん」に登場するこん助は、「風の又三郎」に登場する「郎」がつかない子どもの名前(喜助や耕助など)同様に男子の名前である「助」に、狐の鳴き声である「コン=こん」を合わせて「こん助」としたものと考えられる。

このような狐と子どもとの異類交流は、「狼森と策森、盗森」で狼森の化身である狼が幼い子どもを歓待したことと通じており、「7つまでは神のうち」という思想に近いものがあると考えられる。

いいかえれば、子どもの純粋性ととも、7歳までの子どもは地域の産神の配下にある「神の子」である(宮田登『老人と子供の民俗学』白水社、1996年3月)ため、幼い四朗やかん子と山の神の神使とも思われる白狐たちとの信頼関係が成立したとみることができる。

4. 「茨海小学校」に登場する狐の名前

「茨海小学校」は大正11年初秋頃に執筆され、現存稿は大正12年春までに成立したとされる、狐が登場する生前未発表の童話である。

栗原敦は「『未来圏』・『狐の穴』—宮沢賢治のことば—」(『実践國文學 36』、1989年10月)で賢治

童話「土神ときつね」の舞台について、

固有名詞としての地名は以上の二つと思われていたのだが、「野原の南の方からやって来る茶いろの狐」の住まいにも、きっかけとなる実在の地名はあった。土神に追われて逃げた時「小さな赤剥げの丘」の「下の円い穴」として「狐の穴」が記されるのに対応するような「狐祠」や「穴口」である。

明治四十四年十二月刊の『大日本管轄図 岩手県管内全図』（著作者後藤七郎衛門、発行者中村由松、福岡元治郎）にみられる地名とその位置関係は仲々に興味深い。「狐洞」も「洞口」もまさしく「一本木野」の南方に位置している。（140頁）

と記し、米地文夫は「賢治寓話『茨海小学校』とその背景—環境教育教材としての活用と関わって—」で当時（大正11年）の『岩手日報』のハマナスの記事から、岩手山中腹の滝沢地方（茨島野も一部を含む）が「茨海小学校」に登場する狐小学校の舞台であろうと指摘している（『総合政策 第7巻第2号』岩手県立大学総合政策学会 2006年3月）。

栗原が参考にした上記『大日本管轄図 岩手県管内全図』（明治四十四年十二月刊）を見ると、盛岡の北、岩手山麓の一本木野の南に茨島があり、その左に観武原（現みたけ）、狐洞、滝沢が、滝沢市役所の南にある鶉飼稲荷には稲荷神社があり、作品に登場する〈茨〉や〈狐〉に関係する語が多く使用されている土地であることがわかる。

そして、岩手山麓の一本木野や狐洞は栗原が述べているように、賢治童話「土神と狐」に登場する〈狐〉ゆかりの地でもある。

「茨海小学校」に登場する狐は、役職名だけで氏名の出てこない〈茨海小学校の校長〉を除くと、草でわなを仕掛けた生徒の武田金一郎、三年担任の武村先生、第一教室第一学年担任者の武井甲吉、校長室にわなを取りに行く生徒の武巢、第二教室第二学級担任の武池清二郎という名前になっている。

これに関して前述の米地は、苗字に「武」がつくのは観武原という地名に由来する（「賢治童話における『観るもの』と『観られるもの』」『宮沢賢治学会イーハトーブセンター第5回研究発表記録集』宮沢賢治学会イーハトーブセンター 平成7年）とし、続橋達雄は「『茨海小学校』」（『解釈と鑑賞』至文堂 平成8年11月）で「幼年画報に出ていたたけしといふ人」について童画家の武井武雄ではないかと推察している。

続橋のいう武井武雄とは、明治27年長野県諏訪郡平野村（現岡谷市）西堀に生まれ、大正10年絵雑誌『子供之友』などに子ども向きの絵を描きはじめたことを発端に、大正11年1月には絵雑誌『コドモノクニ』（東京社）を創刊し、企画の段階から参加して創刊号では表紙と題字を描いた人物である。

この『コドモノクニ』という絵雑誌は、挿絵を童話や物語の付属として添えられたものではなく、一つの絵として独立した価値を持つ芸術としたもので、童画の確立を果たした画期的なものとして後の絵雑誌に大きな影響を与えたと言われており、従来の価値観を覆し、画期的な発想をするという点では、武井も「狐の側からの価値観を描いた」茨海小学校も等しく斬新である。

ところで、賢治と同時代の歌人に、北原白秋に師事した岩手県滝沢出身の武島繁太郎がいる。武島は岩手県歌人クラブの初代会長を務めた人物で本名を武田彩吉といい、岩手県の教育界に多大な貢献をしている。この武田彩吉という名前は第一教室第一学年担任者の武井甲吉によく似ているように思

われる。

また上記の地域にある東北道自動車と国道4号線に挟まれた巣子という地名があり巣に武をつけて武巢となり、奥州街道を挟んだみたけの反対側にある狐森のそばに高松ノ池があることから池に武をつけて武池、池が清澄で第二教室第二年度の担任だから武池清二郎、岩手山麓に存在する大谷地湿原から大谷地大学と命名したとも考えられる。

また草わなを仕掛けた武田金一郎は、原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』(東京書籍 1999年7月)の「茨海小学校」の項に「武田金一郎の武をとると田金一郎となり、童[どんぐりと山猫]の主人公、金田一郎(作品では「かねた」と平仮名だが)と同字構成となる」とある。

しかも、金田一郎は現花巻市大迫町にある岳(たけ)集落の子どもで、周囲には大谷地という地名や早池峰湖(湖=池)などがあることから、地名との合体による命名法でいえば、盛岡市の茨島を中心とした地域と、「どんぐりと山猫」の主人公であるかねた一郎の住む岳集落周辺の地名とが共通していることも興味深い。

3. 宮沢賢治作品に登場する狐の種類

『日本書紀』『続日本紀』など古い文献を見ると、白狐や玄狐は瑞兆とされていることがわかるが、今日でも、伏見稲荷大社のHP(<http://inari.jp/about/num04/>)に「白狐は、稲荷大神の眷属として崇められ、古来から稲荷大神の神使としても崇められています」とある。HPには「稲荷勧請」に記載されているオススキ、アコマチという銀の針を並べ立てたような美しい白い善狐の話も掲載されており、また命婦社(今の白狐社)も鎮座している。

また伏見稲荷同様、日本三大稲荷の最上稲荷山妙教寺(最上稲荷)の本尊は白狐に乗った最上位経王大菩薩であり、豊川稲荷の本尊であるダキニ真天も白狐に乗っている。

このように、白狐は日本の稲荷信仰とつながりが深く、信仰の対象にもなっているが、その一方で、黒狐もまた北海道渡島松前郡松前町にある玄狐稲荷や宮城県亶理郡亶理町にある尊久老稲荷神社(総黒稲荷)に祀られており、尊久老稲荷神社の狐は宮城県岩沼市にある竹駒神社の純白の狐と夫婦であるとの伝承もある。

狐の毛色については、日野の前掲書『趣味研究 動物妖怪譚』に、

狐のうちでも黒いものは、シトムベカムイ(神の悪漢)と呼ばれ最も尊敬される。赤色で毛の少ない狐は「夏中山にすんでゐる(サクキムンベ)生物」と呼ばれてゐて、人を化かすのはこの類である。(P.362)

と記されており、赤狐は白狐や黒狐と異なり、化かす存在として考えられていたようである。

童話「雪渡り」に登場する子狐紺三郎や幻燈会の入り口にいた胸にどんぐりの徽章をつけた子狐はみな白狐であり、そのうえ幻燈会には「小さな小さな鼠位の狐の子」もいたと記されている。

この小さな狐は通常の狐ではなく、その形状からオサキ狐や管狐の類ではないかと考えられる。前掲書で日野が「ヲサキ狐といふ狐も上野・下野にゐるが、之も人につく。大きさは鼠のやうで毛白く、斑のもあるといふ。多く連なつてあるくが、人に見えないさうだ」(P.351)と述べており、管狐はまた飯綱権現(飯綱三郎)所縁のものでもある。

純粹に相手を信じて異類を自分と同様に認められる四朗とかん子には、これら異界の存在を見ることも関わることも可能であった。なぜならば、彼らは「神のうち」であり、また正しいものを信じる力の強さは信仰者である賢治が誰よりも強く理解していたからである。

反対に、「茨海小学校」に登場する狐たちは、

白や茶いろや、狐の子どもらが（中略）首を横にまげて笑っている子、口を尖らせてだまっている子、口をあけてそらを向いてはあはあはあはあ云う子、はねあがってはねあがって叫んでいる子、白や茶いろやたくさんいます。

とある。子狐には白も茶色もあり、「虔十公園林」の虔十が「もううれしくてうれしくてひとりでに笑えて仕方ないのを、無理やり大きく口をあき、はあはあ息だけついてごまかしながらいつまでもいつまでもそのおなの木を見上げ」ているように「口をあけてはあはあ云う子」もいれば、「土神ときつね」に登場する狐のように「首を横にまげて笑っている」子もおり、神使というよりは自然体の子狐が描かれている。

その一方で狐小学校の先生は「瘠せた白い狐で涼しそうな麻のつめえり」を着た校長、「実にしゃれたなりをして頭の銀毛などもごく高尚なドイツ刈りに白のモオニングを着」た第一学年担任者の武井甲吉、「黒のフロックを着た先生が尖った茶いろの口を閉じるでもなし開くでもなし、眼をじっと据えて、しずかにやって来」た耳のとがった茶色い狐の第二学年担任の武池清二郎、黒のチョッキだけ着た、がさがさした茶色の狐の三学年担任の武村先生などであり、いかにもよそ行きの気取った人間のような見かけをしている。

そして、第一学年担任の武井甲吉は修身と護身、第二学年担任の武池清二郎は食品化学を、第三学年担任の武原久助は狩猟を担当しているが、校長の話では「午後は第一学年は修身と護身、第二学年は狩猟術、第三学年は食品化学」であったり、第三学年担当の教員は当初武村であったのが教室の掲示には武原久助となっているなどの齟齬がみられる。

ちなみに、これらの狐の教員はみな茶色（赤狐）であり、武井甲吉の修身と護身の授業を聞いた「私」は「何だか修身にしても変だし頭がぐらぐらして来」という一種の〈化かし〉にあったような状態に陥ってしまう。

これは純粹に相手を信頼する異類交流の話である「雪渡り」と真逆の、狐の〈化かし〉が行われている証拠であろう。「雪渡り」では食物交換特に五穀の米（餅）と黍（だんご）の交換を中心とする異類間の信頼の交感を描かれているのに対し、「茨海小学校」では語り手が「狐にだまされたのとはちがいます」とは言いながらも、ようやく見つけた火山弾をうまく言いくるめられて寄付させられてしまう話となっていることから理解できるだろう。

4. 結論

賢治作品における狐の命名法や姿かたちとその役割等を考察すると、狐が登場する賢治童話には昔話や民話等の構成要素と共通した内容が処々に見られる。

「雪渡り」のような人間の子どもと子狐の純粹な異類交流譚であれ、「茨海小学校」のような奇抜な〈化かし〉の物語であれ、狐という昔話の常連である動物が登場すること、見かけと性情とがいかに

も一致するという設定や命名法により、読者は自然と物語に親近感を抱くことができる。とくに子狐を登場させることにより、小さな読者にも親しみやすさを与えることができるのである。

しかも、これら物語の舞台である岩手県は狐との遭遇率が高く、狐は身近な存在であった。

栗原の上記論文のタイトルにもある「狐の穴」というものについて、柳田国男の『月曜通信』の「狐塚の話」(『民間伝承』12巻11・12号 昭和23年12月)に、

さういふ中でも東京から遠くない農村には、塚の上に稲荷の小祠があるから狐塚だといひ、又はその祠の背後には狐の穴のあるものも幾つかある。小塚には狐はよく穴居するから、それから出た名とも考へられ、又現実に狐塚を発掘して、古墳遺物を得た例が二三は報告せられてある^{注4)}

と記されており、狐の穴と狐塚の関係が理解できる。狐塚と古墳、そして田の神と狐との関係については、「田の神の祭り方」(『民間伝承』13巻1号 昭和24年3月～5月)に、

狐を農業と縁の深い動物とし、その中の特に霊ありと認めるものを、京の稲荷山の神と結び付けて、崇敬しようとするやうになつた原因は、さう深い所にもとめようとするには及ばず、単に祭田の近くに又は田の間に、斯んな人為の未開地があつたといふだけでも、十分のやうに私は思つて居る。強ひてそれ以上に付加へるとすれば、以前は狐が今よりもずっと多かつたこと、彼の挙動にはやゝ他獣と変つたところがあり、人に見られたと思ふとすぐに逃鼠せず、却つて立止つて一ぺんは眼を見合わせようとする、それから又食性や子育ての関係から、季節によって頻りに人里に去来することなどを列挙してもよい。(中略) さういふ処に去来し安住し得る者は狐ぐらゐなものであつたらう。^{注5)}

と記されており、本稿で述べてきたように狐の特徴は農耕と密接な関係があると考えられる。そして農の詩人・宮沢賢治の童話作品に登場する狐たちは人里近くに住み、人間らしさをもった〈やゝ他獣と変つた〉挙動をするのである。中村禎里も前掲書で、

報復でなしに動物のほうから積極的に人を襲う例は、タヌキとネコに多くてキツネに少ない。亡妻に化けて男のもとを訪れる事例をさしひくと、人のほうが行動にでなければ、キツネはほとんど無害だといってよい。(中略) 他方、報復行動はキツネ説話に多く、タヌキとネコはほとんどこの型の行為を示さない。キツネの報復行動は、この動物が田の神として人に富をもたらすという古くからの信仰と無関係ではあるまい。とくに近世には稲荷信仰が広くおこなわれていた。人に現世利益をさずける稲荷の眷属に危害をくわえるなら、悪報がかえってくるのは当然である。(208～209頁)

と記して、昔話に登場する狐の特性とその神聖を述べている。

「とっこべとらこ」は賢治の生活圈周辺の土地勘がある場所で、しかも狐ともゆかりの深い地域が舞台であり、これまで述べてきたような狐の習性、民話や昔話の狐の特徴などをうまく取り入れた構成となっているため、賢治の創作であるにもかかわらず、「とっこべとらこ」は昔話のように感じられるのではないかと考えられる。

同様に「雪渡り」は白狐の霊性と東北という風土、そして子どもの純粹さと、純白の雪景色と鏡のような雪渡りの堅雪の無機質さが相まって、神聖さを感じさせるような異類交流譚になっている。

しかしながら、堅雪を渡った先は異界であり、雪山の異界は死の世界と背中合わせでもあることも忘れてはいけない事実である。自然は生死が隣合わせの共生の場であり、またお互いが生きるための

戦いの場でもある。そして「雪渡り」の世界は神のうちにある子どもだけが入ることを許された特別な場として描かれている。作品の舞台が「土神ときつね」同様の場所であったとしても、神使のような純白の子狐には赤狐の狡猾さは見られず、異類である相手を信じることの大切さや子どもの純粋さが、純白の雪景色とともに一点のくもりもない美しい友情として描かれている。

一方の「茨海小学校」はどちらかといえば、「とっこべとらこ」とは真逆の内容である。主人公である「わたし」の興味をそそることで、「わたし」が騙されているという事実を認識できないような状況を作り出しているからである。

「時に今日は野原で何かいいものをお見付けですか。」という狐の校長の言い方は、暗に「わたし」が野原で火山弾を拾ったことを承知していたと思われる節がある。

修身と護身の授業で「最高の偽は正直なり。」「正直は最良の方便なり」と教えているとおり、狐小学校の全員が「わたし」を騙すために学校のあるべき姿を、狐の小学校という人間の小学校とは真逆の価値観をもつ立場として設定し、正直に演じることで「わたし」を混乱させ、半日かけてせっかく探した火山弾を「わたし」は自ら狐小学校に寄付するはめになるのである。

当時の社会通念に対する賢治の疑問を狐小学校が暗に代弁しているかのような作品ともなっている。これはまた単なる狐のいたずらではなく、狐の住居である狐穴や狐塚等、狐の聖域に無断で立ち入った「わたし」への報復行動（利益還元）ともとれるだろう。

「わたし」が火山弾を取られても狐を悪く言わないのは、うまく化かされたのみだけでなく反面教師としての教育の在り方についての思いや狐の縄張りに入り込んだ応報と感じたからでもあるだろう。

天沢退二郎は前掲書で「とっこべとらこ」について、最近の話を導入することで民話の構造を自在に操ろうとする賢治の創作姿勢がみられると述べているが、本稿では賢治童話が親しみやすいのは、我々が以前から親しんでいる昔話や民話の要素をうまく取り入れ、なおかつそれを身近な新しい内容として作品化していることが大きく影響していることを考察した。

そして、その親しみやすさと話の構造の妙が、読者を懐かしくも新しい不思議な賢治ワールドへと導いてくれるのである。

注釈

- 1) 柳田国男『定本 柳田国男集第31巻』昭和53年4月 89頁
- 2) 柳田国男『定本 柳田国男集第31巻』昭和53年4月 94頁
- 3) 柳田国男『定本 柳田国男集第22巻』昭和53年4月 327頁
- 4) 柳田国男『定本 柳田国男集第13巻』昭和53年4月 358頁
- 5) 柳田国男『定本 柳田国男集第13巻』昭和53年4月 392頁

参考資料

- 『新校本 宮澤賢治全集』筑摩書房 1995年6月
 『定本 柳田国男集 第31巻』筑摩書房 昭和53年4月
 原子朗『新宮澤賢治語彙辞典』東京書籍 1997年7月

- 天沢退二郎他『宮澤賢治イーハトヴ学事典』弘文堂 平成22年12月 447頁
中村禎里『日本人の動物観—変身譚の歴史』ビイングネットプレス 2006年5月
福田アジオ他『日本民俗大辞典』吉川弘文館 1999年10月
『日本大百科全書23』小学館1988年9月
佐々木宏幹他『日本民俗宗教辞典』東京堂出版 2005年7月
今泉忠明『狐狸学入門—キツネとタヌキはなぜ人を化かす?—』講談社1994年7月
日野巖『趣味研究 動物妖怪譚』養賢堂 大正15年
宮田登『宮田登 日本を語る 妖怪と伝説』吉川弘文館 2007年2月
中村禎里『日本人の動物観—変身譚の歴史』ビイング・ネットプレス 2006年5月
星野五彦『狐の文学』新典社 1995年10月
天沢退二郎「民話と創造—宮沢賢治と柳田国男」『ユリイカ』青土社 昭和61年7月
柳田国男「おとら狐の話」玄文社 大正9年2月
柳田国男「松島の狐」『東京朝日新聞』大正15年8月
栗原敦「『未来圏』・『狐の穴』—宮沢賢治のことば—」『実践國文學 36』1989年10月
米地文夫「賢治寓話『茨海小学校』とその背景—環境教育教材としての活用と関わって—」『総合政策 第7巻 第2号』岩手県立大学総合政策学会 2006年3月
米地文夫「賢治童話における『観るもの』と『観られるもの』—「茨海小学校」と「猫の事務所」の場合—」宮沢賢治学会イーハトーブセンター第5回研究発表記録集 1996年2月
続橋達雄「『茨海小学校』」『解釈と鑑賞』至文堂 平成8年11月
柳田国男「狐塚の話」『民間伝承』12巻11・12号 昭和23年12月
柳田国男「田の神の祭り方」『民間伝承』13巻1号 昭和24年3月～5月
後藤七郎衛門、発行者中村由松、福岡元治郎著「大日本管轄図 岩手県管内全図」明治44年12月刊
盛岡市HP (平成29年1月12日17:04 最終確認)
<http://www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009408/1009434.html>
秋田県神社庁HP (平成29年1月12日17:03 最終確認)
http://akita-jinjacho.sakura.ne.jp/tatsujin_etc/kennsaku/ugo/05_gendouda.html
茸手町商店街HP (平成29年1月12日17:02 最終確認) <http://www.fukidecho.com/index.php>
高尾山総合情報サイト「高尾通信」『天狗の総合研究サイト、天狗参上』(平成29年1月12日17:01 最終確認)
<http://www.takaosan.info/tengu/index.html>
伏見稲荷大社HP (平成29年1月12日13:20 最終確認) <http://inari.jp/about/num04/>
武井武雄の世界 イルフ童画館 (平成29年2月5日16:22 最終確認) <http://www.ilf.jp/takei/chronology.html>

A study about Foxes which are characters of Kenji Miyazawa
—Relationship with folk tale—

TAKAHASHI Naomi

Summary

First of all, this treatise focuses on “Takkobe-Torako”, “Yukiwatari” and “Ibaraumi-shougakkou” which were written by Kenji Miyazawa. This compares foxes which are a character of Kenji Miyazawa’s tales and other folk tales, a study of why his fox characters seem to feel familiar to Japanese people.

Differing from Kenji Miyazawa’s other conventional opuses, he depicted a different fox character in those three of his works. It may be true that his stories and character compositions were based on some old stories and folktales. In addition, it can be seen that those three works show us not only traditional compositions and stories but also his peculiar thoughts on trust, equality and causality between different creatures.

I believe that the reason why Japanese people can read his unique foxes’ stories as friendly is that the characters contain many traditional compositions and characters which have become familiar to Japanese people for long as basic strictures.

Key words: Kenji Miyazawa, “Takkobe-Torako”, “Yukiwatari”, “Ibaraumi-shougakkou”, folk tale